

カトリック六甲教会 教会報

2011

1

No.469

あけましておめでとうございます。

主任司祭 松村 信也



昨年の夏は記録づくめの猛暑でした。“暑”いより、熱い・ホットヒートの方がピッタリの夏でした。地球の温暖化が騒がれはじめて何年経ったのでしょうか。一向に大国においては、地球の温暖化対策すら出さないのが現状です。にもかかわらず、経済成長率は世界第一位とか二位とか競い合っています。「三位じゃいけないのですか！」と言いたくなりますね。

経済の主流IT産業界の進展は、凄まじいものが見られます。この発展ぶりを見ると、かつての高度経済成長期を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。政治家、官僚、企業経営者が話し、国の経済成長政策の遂行と企業の保護のためには、どのような“負の側面”がもたらされようとも無視した政策そのものが、現在のIT産業界の経営者たちの発想なのです。彼らの政策は、自社の収益や損失、市場株価の推移、自社の商品開発投資、事業拡大の規模といった数字だけに終始することがメインとなっています。したがって、もうそこには“負の側面”を担うことになる弱者、あるいは将来を担っていく子どもの心の問題とか親子関係のあり方と言ったことには、全く関心さえ示さないのです。皆がすべて、そうだとは言えないでしょう。しかし、この現実を知らされるとき、そうとしか思えないのです。経済に無頓着な者でさえ、将来を生きる子どもたちのことを考えるとき、不安になるのです。

儲け主義の経済至上主義は、バブル経済崩壊後、その白黒の凄まじさがエスカレートしました。事業・業務の合理化・効率主義、分社化・下請け化（分業）、そして派遣労働力へのシフトといった労働力の“たたき売り or 買ったたき”の実態は、殆ど搾取と言っても良い状態になっています。

この様な状態に口を閉ざしたままで良いのでしょうか。この現実をどのように受け止め、どのように改善すれば良いのでしょうか。休日も取れず、サービス残業の労働実態の中で家族の平和とか子どもの育児・教育を真剣に考える家庭はどれ程あるのでしょうか。当然の結果として、DV（家庭内暴力）や子どもへの虐待が増加しているのです。

この現実社会の中で、何も知らずに働いている若者たちに「希望をもって、明日に向かって生きなさい。今の苦勞は必ず将来の肥やしになる」と言えるのだろうか。弱肉強食、傍若無人、我田引水など、自己中心の社会の中で「優しい心、人への思いやり、感謝の心」は口上だけで、自己中心に上手く世渡りすることが、現代人の処世術なののでしょうか。事実そんなタイプの間が、聖職者の間にも増えているのです。

新たな年、先ず、自分自身から抜本的な改革をする必要があるでしょう。自分が変わってこそ、周りに変化が起こることは確かです。困難なときだからこそ、粉骨砕身の気概で現代病の根源をキリストの愛で治療しませんか。自分のためではなく、人のために奉仕できる新たな年、変革の年にしませんか。あなたと、そして新たに私たちの中に生まれて下さった主イエスと共に生き直しませんか。

キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに



【伝承】

神はキリストにおいて完成した啓示が保たれ、あらゆる世代に伝達されるよう計らった。この啓示の伝達は、キリストから福音を宣べ伝えるように命じられた使徒たちによって、その説教と模範と制度を通じ、またこれを書物に書き記すことを通じて遂行された。

伝承の概念：

伝承の字義は「手渡すこと」。つまり、神から啓示された言葉を手渡すことを意味する。

これには、二つの別個のものがある。

- ① 人類のはじめから使徒時代に至るまでの神からのすべての啓示が、世代から世代へ伝えられ、神の導きのもとにキリストによって、創立された教会において保存されている。
- ② 聖伝という場合、伝達された啓示のうち、聖書に含まれていない神からの啓示の言葉を意味する。これは第二バチカン公会議以前の考えである。第二バチカン公会議によれば、聖伝は言葉だけでなく、命である。聖書に含まれていない啓示の言葉があるかということについて、第二バチカン公会議は、何も言っていない。

公会議は「使徒たちは、自分たちがキリストの口から聞いたこと、キリストの生活と働きから学んだこと、あるいは聖霊の導きによって学んだことを説教をもって口で話すことによって、自分たちの模範によって、自分たちが定めた様々な制度によって伝えた」のである（啓示憲章7項）。伝承は、三つの手段を使って行う。

- ① 語ること。
- ② 制度・儀式・祭り・音楽による。
- ③ 書物（書物、木版、石版など）、聖なる書物。

使徒伝承：

啓示がイエス・キリストに対する信仰によって受け止められて、キリスト教伝承が形成されはじめた。そして、イエス・キリストに対する信仰を初めてもち、イエス・キリストの啓示を信仰によって初めて受け止めて、キリスト教伝承の最初の担い手となったのが使徒である。

伝承の基本的内容は、「ケリュグマ・κ η ρ υ γ μ α（神の啓示の伝達・使信）」と呼ばれる。この伝承は、神である御子が聖霊において使徒に託したものである。

書物：

原始教会は聖なる書、靈感による書を初めから持っていた。それは旧約聖書である。旧約思想に流れるいろいろなものの中から、キリスト論的に解釈した。次第に教会の中に新しい書物が書かれる。アポストリ（使徒たちが書いたもの）。Viti Apostolici（使徒たちの協力者によるもの）。彼らはいずれも旧約に匹敵するものを書いているという意識はなかった。ルカは確かに意識していなかった（彼は歴史家として書いている）。新約聖書は当時起こったいろいろな問題について書いている。すべてこれら書物は教会の中で書かれたものである。

教会：

使徒の担う伝承をつげ知らされ、その伝承の中に神の言葉を見いだす人は、その時点で信仰を持つ。そして伝承において、伝承は再解釈され、新たな伝承が形成される。この伝承の担い手が教会である。教会は使徒的伝承である「ケリュグマ」を受け入れ、世界にそれを伝達する共同体である（マタイ 28:19-20）。使徒後の教会の特性は使徒性である。この使徒性を保つものは、教会の中で働く聖霊であり、信仰に生きるすべての信者たちであり、かつ使徒の後継者としての教導職制である。また教会において伝承は、その使徒的伝承に基づきつつも、再解釈され、これが教会における伝承の躍動性の理由である。

教会による正典（2～3世紀に次第に新約の正典を確認）：

マルキオン派（イエスの人間性を否定する仮現説を主張）の攻撃によって制定された。教会はどのように知るようになったか。それは、聖霊の本能、香りで判るといふ。旧約が読まれた頃、キリスト教的に解釈され、そして新約を読んでいくとき、使徒たちの宣教に由来する信仰を持っていた皆が“これだ”と悟るようになった。“花婿の声は花嫁に判る”。K.ラーナーは「聖霊靈感」を次のように説明する。「神はキリストの福音を信じている教会が、世の終わりまであるように定め、その創立時代に書かれた基本的な書物もあるように神が決定された。神の決定であるから、決定した通りになる。神が基本的な聖なる書として読むように望んだものを、教会は実際に聖書として読んでいる。」

プロテスタントの主張：

プロテスタントは、教会の諸伝承に疑いを持ち、それによって純粋な福音が不明瞭になったと感じた。そこでプロテスタントは『聖書のみ、キリストのみ、神のみ』と主張した。人々の伝承に従わず、神の言葉に従いましょう。これに対してトリエント公会議は、次のように言った。「源は一つ、福音である、それは聖書と書かれていない諸伝承とによって伝えられている。後者は、キリストの口から使徒たちを経由して、私たちに伝わった」。トリエント公会議のカトリック神学；神が啓示した言葉の一部分が聖書、他は伝承として伝わった。従って、両方を私たちは受け入れなければならない。今世紀のカトリック神学者ゲイセルマンは、トリエントの新しい解釈を出した。即ち、啓示の全体は、聖書にも伝承にもある（少なくとも種として持っている）。

第二バチカン公会議：啓示憲章

7項：キリストの福音は唯一の泉。

9項：聖伝と聖書は、互いに堅く結ばれ、互いに共通するものがある。何故なら、どちらも同一の神的起源を持ち同一の目的に向かっているからである。教会は、啓示されたすべてのことについての確信を聖書だけから受けているのではない。

10項：聖伝と聖書と教会の教導職とは、神の極めて賢明な配慮によって、互いに関連し、結合されている。教導職は、神の言葉の上にあるものではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。

聖書の中心は、古代教会の信条によって明らかにされる。そこに聖書の神髄を見いだすことができる。教会の中では、そんなに価値のないものも伝承として伝わっていくものもある。従って、聖書、伝承、教会の教導職、これらはすべて教会の中でバランスよく見ていくことが大切である。

主任司祭 松村信也

<訂正> 教会報12月号「キリスト教の基礎知識」の文中に誤りがありました。

4. 第二バチカン公会議の公文書から見る（3）宣教活動の教令7項

【誤】神に黄泉されることはない。 → 【正】神に嘉されることはない。

ここに訂正をし、お詫び申し上げます。

～～～ 祈りの道場 ～～～

日 時： 1月29日(土)10:00～ 15:00 よりミサ

会 場： 大聖堂

指 導： 英 隆一朗神父

テーマ： 小さき花のテレジア（リジューのテレジア）

費 用： 600円（昼食代）

聖堂入口の申込書にて事前申込して下さい。



<行事報告>

∞∞∞ 結婚準備セミナー クリスマス会 (12月5日) ∞∞∞

12月5日に、結婚準備セミナーのクリスマス会が開かれました。昨年は、クリスマス会がお休みだったため、2年ぶりの開催となりました。

お御堂で家族ごとのお祈りを奉獻して、神父さまに祝福していただきました。祝福式で、松村神父様は、早稲田の斉藤祐樹選手が「持っているのは仲間だったと気がついた」と話したことに触れ、セミナーの卒業生も子育て真っ最中で苦勞している同じ仲間と考えて、パーティーでは親交を深めて「仲間作り」をして下さいと応援の励ましを頂きました。



祝福式のあとは、お楽しみのパーティーです。受験生を抱えたベテラン家族から1週間前に結婚された新婚夫婦までが一堂に会しました。恒例の家族の近況報告では、2年ぶりのクリスマス会を本当に楽しみにしていたと話される家族が多く、パーティーはさながら学校の同窓会の雰囲気となり子育て話やビンゴゲームで大いに盛り上がりました。神父様のエール通り、楽しい「仲間作り」のひと時を過ごしました。結婚準備セミナースタッフの皆様、ありがとうございました。(小田)



<行事報告>

∞∞∞ 婦人会 黙想会 (12月10日) ∞∞∞∞

婦人会黙想会に参加して

12月10日(金)、恒例の婦人会黙想会が宝塚黙想の家で、19名の参加者を得て行われました。折しも待降節の中、「希望一神の思いやりへの驚き」のテーマのもと、御受難会の山内十束師の指導によっておおよそ半日に亘る会は進められました。日頃こまごまと私達を追い立てる仕事の数々から離れ、黙想の家の静謐の中でのひと時は、予想を上回る祈りの体験ともなったように思われます。(久野)

もし「信じる」ことに意味があるとするなら、それは「私達が予想もしていないほど大きな」ものでなければならぬはず。驚くほど、大きなものでなければならぬはずです。(山内師のレジユメより)

各部だより

婦人会

1月14日(金)11:00より、イグナチオホールにおいて婦人会新年会を開催します
聖堂入り口に申し込み用紙があります。
締切りは1月9日(日)です。



教会学校

1月9日(日) 子どもと共にささげるミサ
1月15日(土) 始業式 & おもちつき
1月22日(土) 通常クラス
1月29日(土) 通常クラス
(第1週目がお休みだったので、
5週目ですが、クラスを行います。)

広報部

1月29日(土) 教会報2月号を発行します。
10:00頃からページの組み合わせをします。
簡単な作業です。お手伝い下さい。

《お知らせ》

★社会活動部より★

- 1月5日(水)10:00 手芸の集い (第1・2会議室)
どなたでも参加ご自由です。
- 1月16日(日)10時ミサ後 ミニバザー・手作りコーナー (イグナチオホール)
お弁当・食料品・手作り作品等の販売
- 1月20日(木)14時ミサ後 ベタニアの集い (イグナチオホール)
聖体拝領式&茶話会
- 1月28日(金)9:30 ともしびケーキづくり (お台所)
※ 今月の炊き出しはお休みです。

越年越冬の炊き出し

12月28日(火)~1月5日(水)10時~

例年通り 東遊園地にて

カトリックの当番日は1月1日と5日の予定です。





みんなの広場

さよなら「みさご」

2010年10月31日を最後に「みさご」の仕事を終了いたしました。22年前、オマリ神父様から「ミサの後、すぐ皆ばらばらに帰るのではなく、会話を楽しめるようなプログラムを考えてみないか」とご相談を受けました。初代教会のいきいきと活動する姿に憧れている私の頭にはすぐ使徒言行録2:48が浮んできました。

「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き
喜びと真心をもって一緒に食事をし…」

これだ！コーヒーとパンだけなら私だってサービスできる、と決心した時、神様は戦後の粗末な隣り合わせの事務所で働いていた松尾さんに主日のミサで久しぶりに巡り合わせて下さいました。それから22年間、彼女は日曜日休むことなく、朝6時からコーヒーを沸かして朝食の用意をして下さいました。いつ迄続くかと心配する人々の声も聞こえましたが、一緒に食事をする喜びを一度でも味わうと、もう辞める気分にはなりません。ボートを漕ぐように漕ぎ手は行く方向には背を向けているので、行く手に何かがあるか、何が起きるかわからないのですが、ボートの中でただ一人舵を取る人はいつも前方を見つめて船の行く手を定めています。神様はボート「みさご丸」に次々と漕ぎ手を送って下さるので働き人はいつも満たされました。

舵を取るのは勿論イエス様です。浅瀬も荒波も乗り越えて、この日10月31日、イエス様は「みさご丸」を静かな入り江に導き、私達に「もう漕がなくてもよい」とお命じ下さいました。私達は有り難く御言葉に従いました。一緒に働いた方々、一度でも一緒にパンを食べて下さった方々、「みさご」を愛して下さって、ありがとうございました。松尾さんも私も結構高齢者となりました。これからはみ国に旅立つ日に備えて祈りを深めたいと願っています。(燐)



去年今年

去年今年貫く棒の如きもの

年初には必ずといってよいほどこの句が思い浮かぶ。作者がこの棒をどう考えていたかは知らないが「如きもの」というから何かがあると思っていたのであろう。昨日といい今日といい、午前といい午後という。それは人間が便宜上付けた区切りにすぎない。時は同じように過ぎていく。その一つの区切りはこの言葉で始まる。

最近はこの棒、福音を甘く見過ぎているのではないか。今は歌われなくなった続唱「Dies irae」にこの言葉があった。「その時、哀れなる我、果たして何かを云い、誰かを弁護者と仰がん。」

福音書に甘い言葉は見当たらない。「我を索ねんとて疲れ、我を贖わんとて十字架の極刑を忍びし故、かかる御労苦をむなしからざらしめ。」

かつて一休和尚は元日に髑髏を掲げて京の街を駆けたという。(ヨハネ榮之助)

教会報1月号の発行は、1月30日(日)です。 編集会議は1月23日(日)です。 記事原稿は、1月16日(日)正午までに信徒会館 受付へご提出願います。(広報部) http://www.rokko-catholic.jp	カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会			
	〒657-0061	神戸市灘区赤松町3-1-21		
	電 話	0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6		
	F A X	0 7 8 - 8 5 1 - 9 0 2 3		
	発行責任者	松 村 信 也		
	編 集 広 報 部			